

カンキツ新品種 ‘佐賀果試4号’ について

八田 聡・松尾洋一¹⁾・大藪榮興¹⁾・中村典義・大原有美子・末次信行
(佐賀県果樹試験場¹⁾・佐賀県農業試験研究センター)

Satoshi Yatsuda, Youichi Matsuo, Eikou Ooyabu, Noriyoshi Nakamura, Yumiko Oohara and Nobuyuki Suetsugu :
New Citrus Cultivar ‘Sagakashi No.4’

佐賀県果樹試験場では、カンキツの新品種を育成してきた。そのうち糖度が高く果皮の締まりがよく芳香があるカンキツ ‘佐賀果試4号’ を育成したので育成経過と特性概要を報告する。

1. 育成経過

1992年に ‘アンコール’ (キング×地中海マンダリン) を母本に ‘陽香’ (清見×ポンカン) を交配し得られた種子を、外種皮および内種皮を剥皮したシャーレに播種し発芽させ、プランターに鉢上げし育成した。

この幼苗を無加温のガラス温室内で育成し、高接ぎの穂木が採取できるまで1本仕立てで誘引、伸長させた。そのうち生育の良い20個体の実生苗を1993年に圃場内の11年生 ‘サガマンダリン’ を中間台として高接ぎを行った。徒長させた柱梢を支柱に誘引し、2.5m程度に達した枝の先端を引き下げて開花を促進させた。1996年より結実が始まり個体選抜を開始した。

1998年に結実した1系統は、非常に糖度が高く、じょうのう膜が薄く、ポンカンに似た香りがあるなど品質が優れていたため継続して調査した結果、果実品質が良好な晩生のカンキツと確認された。このため ‘佐賀果試4号’ として現地適応性試験を開始するとともに、品種登録申請の準備を行っている。

第1表 カンキツ新品種 ‘佐賀果試4号’ の果実品質 (1999年~2001年)

分析日	平均果重 (g)	果形指数	着色歩合	果肉歩合	果皮* 色	含核数	糖度 (%)	クエン酸含量 (%)	糖酸比
2000/1/17	151.3	119	10.0	82.3	—	—	12.4	1.19	10.4
2001/1/15	182.3	125	10.0	82.1	8.0	3.8	12.4	0.87	14.2
2001/12/20	181.0	122	10.0	84.1	—	4.1	11.3	1.07	10.6
2002/2/14	190.2	126	10.0	81.5	9.0	10<	13.5	0.89	15.2

第2表 カンキツ新品種 ‘佐賀果試4号’ の果実品質 (2001年1月15日)

品種・系統	平均果重 (g)	果形指数	着色歩合	果肉歩合	果皮* 色	含核数	糖度 (%)	クエン酸含量 (%)	糖酸比
佐賀果試4号	182.3	125	10.0	82.1	8.0	3.8	12.4	0.87	14.2
清見	262.8	118	10.0	77.9	7.1	1.2	9.7	1.31	7.5
勝山伊予柑	260.8	117	10.0	72.4	7.0	7.0	10.6	1.18	9.0

注) *旧農林水産省果樹試験場作成のカラーチャートによる。

第3表 カンキツ新品種 ‘佐賀果試4号’ の樹体特性

項目	特性	項目	特性
樹勢	中	ジョウノウ厚さ	薄
枝梢の粗密	中	肉質	中
トゲの多少	少	果汁量	多
花の多少	中	苦み	無
成熟期	1月中下旬	嗜好性	良
果形指数	125程度	種子	5粒程度
果実重	190g程度	貯蔵性	良
果皮厚	薄	浮き皮	無
香り・量	ポンカン・中	スアガリ	無

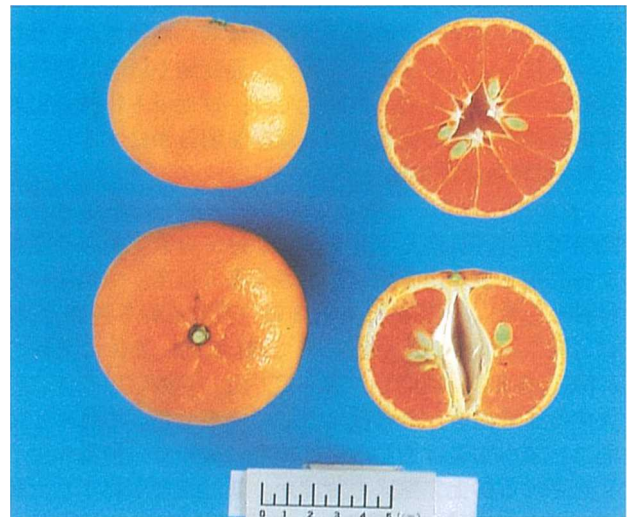


写真1 カンキツ新品種 ‘佐賀果試4号’ の果実

2. 特性の概要

樹勢は中程度で、樹姿はやや直立性で樹冠は長円形を呈する。枝梢の長さは中程度、葉の大きさも中程度であり ‘清見’ 程度である。葉身の形は卵形である。花は単生有葉花が中心となる。かいよう病やそうか病については、通常の管理作業を行っていれば問題はない。

果実の大きさは200g弱で、果形は扁球形で果形指数は125程度である。果皮は橙色で非常に締まっている。果皮は滑らかであり剥皮性は中程度である。さじょうの大きさは中で、果汁は多く肉質は柔らかくす上がりもみられない。じょうのう膜は薄く、袋ごと食べられる。香りについてはポンカン系の芳香がある。果汁の糖度は1月中旬で12%以上と安定して高く、2月上旬には13%まで上がる。食味は非常に良い。減酸については1月中下旬に1%を切る。種子は平均で5個程度である。

これらのことより、本品種は1月中下旬頃出荷可能なカンキツとして有望であり、ポンカンの代替品種になりうると思われる。また、果皮が強く浮き皮にもならないため、施設用カンキツとしても十分栽培可能であると考えられる。